

名寄市が一体となった学校力向上の推進

名寄市立名寄東中学校
学級数 7
(校長 櫻庭 一也)

I はじめに

これまで名寄市では、教育の内容や方法等に関する調査研究を行う名寄市教育研究所の中に指導改善検討委員会等の組織をつくり、その都度、喫緊の教育課題に対応してきた。

しかし、学力の向上をはじめ体力の向上など教育課題が山積していることから、従来の教育研究所の取組のほかに、総合的に学校教育を見直し、効率よく諸課題の解決を図る必要があった。

そこで、各学校の特色を生かしつつ効果的な取組を共有し、全小・中学校で成果を上げることをねらいとして、平成24年度に名寄市教育研究所内に名寄市教育改善プロジェクト委員会（以下、「プロジェクト委員会」という。）を設置した。

令和3年度のプロジェクト委員会は、「児童生徒に『生きる力』を育み、夢と希望を拓く名寄市教育の創造～全小・中学校が一体となった学校力向上の取組を通して～」を推進テーマに、市内の全小学校7校と全中学校4校の校長と教頭及び各学校から選出された教員を委員として、学校力向上を図る小中連携の取組等を推進している。

具体的には、各委員は、「教育経営の充実に関する研究グループ」「教育研究（研修）の充実に関する研究グループ」「教育指導の充実に関する研究グループ」の3つの研究グループに分かれ、市内全小・中学校が一体となった小学校高学年における理科の専科指導による学習指導の充実を図る取組や、教育の質の向上に向けたICTの効果的な活用に関する研究等を通して、全小・中学校の教育活動等の改善・充実を図っている。

以下、プロジェクト委員会の取組を踏まえた、学校力向上の取組の主な実践について述べる。

II 実践の概要

1 全小・中学校が一体となった効果的な小学校高学年における理科の専科指導体制の構築

小中9年間を見通した教育課程や教育活動の充実、小・中の円滑な接続等を図ることが重要であることから、名寄市では、下図のように学校力向上に関する総合実践事業の事業内容である専科加配を活用し、全小・中学校が一体となった効果的な指導体制の構築を図った。

本校では、2名の理科教員が小学校3校に出向き、第5学年及び第6学年理科の教科担任を担当している。以下、実践内容と成果を述べる。



専科教員が、小・中学校双方で指導を行ったり、それぞれの学校種の指導内容や指導方法等を交流したりすることを通して、小中連携した系統的な学習指導の充実を図るとともに、専科教員が小・中学校それぞれの校内研修に参加し、指導方法を交流したり、互いのよさを取り上げながら授業改善のアイディアを出し合ったりするなど、小学校から中学校への円滑な接続に資する体制を構築した。

このことにより、専科教員の指導力の向上と9年間を見通した授業改善が図られるとともに、長期

的な視点では、小・中学校のよさを取り入れた教科指導を行うことにより、専科教員が指導した児童が中学校に入学した際の「中1ギャップ」の緩和が期待される。

(2) 小学校の教育活動の充実

専科教員を導入することで、学校の教育活動の充実や教師の負担軽減、複数の教師（学級担任・専科教員）による多面的な児童理解に基づくきめ細かな指導の充実に取り組んできた。

このことにより、授業時数の軽減が図られ、学級担任が授業準備を行う時間を確保することができた。また、専科教員の授業実践から学ぶ機会を設けたことにより、専門性の向上が図られ、児童の理解度・定着度が高まった。



【中学校理科教員による小学校での指導】

2 ICTの効果的な活用による学習指導の充実

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるには、1人1台端末等のICTを効果的に活用した授業改善を図ることが重要なことから、学校では、日常的に活用できるICT環境の構築と1人1台端末を効果的に活用した授業改善を推進している。以下、主な実践内容と成果を述べる。

(1) いつでも使えるICT環境の整備

1人1台端末導入当初は、時限毎に端末を保管庫に戻していたが、使用頻度の増加に伴う出し入れの煩雑さを軽減するため、タブレットケースを購入し、登校してから下校するまで、各自で保管することとした。

このことにより、生徒が「自分でICTが必要な場面を考え、いつでも使える環境」をつくることができ、学習者中心の授業改善を図ることができた。

(2) 指導方法や評価方法の工夫

各教科では、下表のとおり、ICTを効率的に活用した指導方法や評価方法を工夫している。

教科	ICTの活用例
国語 英語	・スピーチや暗唱などの動画を撮影・記録し、授業後の評価に活用
社会	・調べ学習での活用のほか、学習支援アプリ（ロイロノート）を活用し、テーマ学習の発表、アンケート機能を使った意見の集約、生徒の考えの交流、ミニテスト、アンケート等（社会）の実施
数学	・デジタル教科書の図形操作機能を活用 ・習熟度別指導において、解法をインターネットで検索するなど、多様な考え方に対する触れる機会の確保
保健 体育	・生徒が自分の動きを撮影し、課題を発見したり改善に役立てたりしているほか、前時と比較し、自己の成長を確認
美術	・インターネットを使って、作品作りのアイディア収集 ・作品を撮影し、画像を生徒同士で交流 ・作品画像を提出させ、評価に活用（スケッチブックを集めることなく評価が可能）

【ICTの活用による指導方法や評価方法】

学習の振り返りや単元のまとめの記入にICTを活用することで、容易にデータの蓄積ができたり、資料やワークシートの配付・回収を短時間で行うことができたりするなど、効率的な指導や評価を行うことができた。

また、発表に消極的な生徒の意見を取り上げやすくなるなど、個に応じたきめ細かな指導の充実を図ることができた。

III 今後に向けて

新学習指導要領に示された「社会に開かれた教育課程」を実現するには、小・中学校の連携を強化し、全教職員が一つのチームとなって学校力を高めることが重要である。

今後も、学校では、児童生徒に「生きる力」を育むため、プロジェクト委員会の取組と連動させながら、「小学校高学年における理科の専科教員による質の高い授業の実施」や「ICTを効果的に活用した授業改善」などの学力向上に資する取組を通して、学校課題の解決に資する組織的・戦略的な学校改善を推進する。